

平成 29 年度

学 校 評 価

< 記入上の留意点 >

評価 は教職員、評価 は校園長、評価 ・評価 は学校関係者評価委員の評価を記入する。

評価 は小数第一位まで記入する。評価 は4段階を基本とするが、0.5刻みまでを許容とする。
評価 はA B C Dで記入する。

学校の実態に応じて評価内容を追加して設定することができる。

評価、評価 の基準

4	十分達成できた
3	達成できた
2	取り組んでいるが、成果は十分でない
1	取組が不十分である

評価 の基準

4	よく取り組んでおり、成果が大きい
3	熱心に取り組んでおり、今後が期待できる
2	取り組んでいるが、成果は十分でない
1	取組が不十分である

評価 の基準

A	優れている
B	適切である
C	おおむね適切である
D	要改善

尼 崎 市 立 南 武 庫 之 荘 中 学 校

平成29年度 学校評価

[各校の重点取組について]教育目標である「1. 人権尊重の精神を育成する2. 個性を伸ばし、主体的な態度を育成する3. 豊かな心、健康な体を育成する4. 確かな学力を育成する」の具現化に向けて、具体的な取組として「1. 豊かな人権感覚の育成を図る。2. 規範意識の定着を図る。3. 生徒の自治活動の推進を図る。4. 基礎・基本の学力の定着を図る。5. 発展的な学力として、表現力の育成を図る。」の5つを設定し、その達成に向けた学校全体での取り組み状況を報告します。

学校教育に関する重点取組

	評価 (教職員)	評価 (校園長)
1 教育・学習内容を充実させ、確かな学力を身につけさせる (1) 授業改善の取組を促進するとともに家庭との連携により、学力向上を推進する (2) 特別支援教育の取組を充実させ、自立や社会参加に向けた主体性を育成する	3.4	3
取組とその成果	課題と改善策	
小テスト成績や提出物、授業への取り組み方等を総合評価し、基礎基本の定着徹底に取り組む。 授業50分フル活用のため教師のチャイム始業の徹底を図る。教師のチャイム入室が生徒のチャイム始業となる授業規律の確立と授業の充実に努め、学力向上に繋げる。 小中職員合同研修や行事等への相互参加、出前授業や入学前テストを実施し、小中連携を推進する。 家庭学習の定着に向け、家庭との連携を図り、自主学习ノートの作成・提出を啓発する。 特別支援教育コーディネーターを中心に特別支援教育推進委員会を組織し、特別な支援を要する生徒の状況、支援について情報共有する。	低学力生徒への継続指導が難しく、今後の課題。 小中連携における課題を究明し、連携強化に努める。 協働学習を取り入れ、コミュニケーション能力、言語活動を充実させる。 家庭学習定着に向け、保護者との連携を強化する。 特別な支援を要する生徒への支援計画作成、情報共有を推進する。	
2 心の教育を充実させ、自己実現の意識の高揚を図る (1) 道徳性育成の取組を促進し、思いやりで満ちた人間関係及び社会とのかかわりづくりに努める (2) 基本的な生活習慣確立の取組を促進し、心身共に健全な育成を図る (3) キャリア教育の取組を促進し、社会的自立に必要な能力を育成する	3.4	3
取組とその成果	課題と改善策	
「きらめき」を中心とした道徳授業の充実を図り、道徳的判断力、態度を養う。集団の中で相手の心を思いやる人間を育成する。 日常の学校生活において、授業規律等基本的な生活習慣の確立に努める。 毎週生徒指導委員会を実施し、情報の共有を図るとともに、規範意識の高揚に向けた取組を充実させる。 毎週の教育相談委員会実施とスクールカウンセラー、子ども自立支援室指導員との綿密な連携を図る。毎学期の教育相談週間の設定と相談室活用を啓発する。 3年間を見通した進路指導計画及び進路指導ノートの活用。	道徳教育の深化のため教員個人の研修が課題である。 平成31年度に向け、道徳科として評価をどのようにするのか、共通理解させるのが課題である。 保護者との連携を密にし、きめ細かな指導を継続する。 ケースによりSC、子ども自立支援室指導員で対応しきれない現況があり、SSWの活用、保護課等関係機関との連携を図っていく。 1年次から進路目標を持たせる指導が必要である。	

3 食育や体育を充実させ、健康な体づくりに取り組む (1) 食育を通して生活改善の取組を促進し、望ましい生活習慣を育成する (2) 体育・スポーツ活動の取組を促進し、体力・運動能力の向上を図る	評価 (教職員)	評価 (校園長)
	3.3	3
取組とその成果	課題と改善策	
食育教育を中心に基本的な生活習慣の確立、保健委員会での「健康管理」について積極的に進め意識の向上に努める。 家庭科や保健体育などの教科において「食生活」「体力づくり」への大切さを指導する。	家庭とどれだけ「健康管理」「食生活」について連携がとれるかが課題である。 生徒会活動の一環として生徒への啓発活動等保健委員会の取組をより活性化する。	

4 安全な教育環境を確保し、防災意識の高揚を図る (1) 安全教育の取組を促進し、登下校及び学校園内の安全確保を図る (2) 防災教育の取組を促進し、危機管理能力の向上を図る	評価 (教職員)	評価 (校園長)
	3.3	3
取組とその成果	課題と改善策	
関係機関に協力をいただき、生徒を対象にした安全に関する研修に取り組んでいる。 自転車の安全教室を実施し、交通安全指導の徹底を図るとともにネットトラブルから身を守る情報モラル教育を推進する。 2回避難訓練・消火訓練を実施するとともに、DVDを活用した防災教育を推進させ危機管理能力の向上を図る。 消防署と連携を図りながら、BFC活動を推進する。	緊急時におけるAEDの使用方法を教職員に共通理解させる。 登下校時の通学路の安全を確保する。 交通ルール、情報モラルの遵守が自分を守ることにつながることを理解させる。 訓練を通して、学校外における防災意識を高揚させる。	

5 家庭・地域・学校の連携を深め、信頼され、活力に満ちた学校園づくりに取り組む (1) 教職員の資質向上の取組を促進し、学校の組織力及び教育水準の向上を図る (2) 地域の教育力を活用した取組を促進し、地域とともにある学校づくりを推進する	評価 (教職員)	評価 (校園長)
	3.3	3
取組とその成果	課題と改善策	
魅力ある授業づくりに向け、校内研修を積極的に実施し教職員の意識を高める。具体的には、校内研究授業、アクティブラーニング等職員研修、オープンスクール等を実施する。 「あいさつ日本一」を目標に掲げ、登校時のあいさつ運動を徹底指導する。 NIEを実施。記事をきっかりに保護者と意見交換を進め、連携を推進する。 「学校だより」を地域諸団体や施設、3小学校へ配布し、情報提供するとともに学校啓発に努める。HPの随時更新を図る。 地域の図書ボランティアを活用し、読書活動を推進する。	評価時期が課題である。 多くの保護者がオープンスクールに参加できるよう計画、啓発する。 登校時の挨拶運動を充実させ、遅刻ゼロを目指す。 地域に開かれた学校を目指し、情報を積極的に発信する。発信方法を工夫する。 地域の人材を活用して、読書教育を推進する。	

教育目標		評価 (教職員)	評価 (校園長)
			3.1
(1) 教育目標の達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 教育目標の具現化と指導の充実			
取組とその成果	課題と改善策		
4つの教育目標と併せて生徒の努力目標として 「あいさつ日本一」 「遅刻ゼロ」8時20分の予鈴で全員登校 校歌の歌える生徒づくりに努め、愛校心を育成する 目標達成に向け、全生徒と全教職員で積極的に取り組む。	生徒の努力目標達成には、家庭における保護者の支援が必要であり、学校・家庭との連携をより推進することが課題である。保護者・育友会・教職員の協力を得て、目標達成を図る。 授業研究、教科研修などを充実させ教職員の指導力向上を図る。 毎朝朝礼で校歌を三番まで生徒会のリードのもと歌う。 文化・体育クラブ活動、総合体育大会等で学校を代表して参加している意識を育む。		

研究テーマ		評価 (教職員)	評価 (校園長)
			3.4
(1) 研究テーマの達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 研究テーマの具現化と指導の充実			
取組とその成果	課題と改善策		
主体的・対話的で深い学びの実現(アクティブラーニングの視点)を入れた授業を通じて、自分の考えをしっかりと相手に伝える力と相手の考えをきちんと聞き取る力を育て、全体的な学力向上を図る。 特別活動等による発表の場を設け、「表現力」の育成を図る。 積極的な作文及び論文指導を図る。	授業において、「表現力」の育成に向け、グループで討議する機会、発表機会を増やす工夫が必要である。 学校行事において、生徒が自分の考えや意見を発表できる場を設定する。		

		評価 (教職員)	評価 (校園長)
取組とその成果	課題と改善策		

学校関係者評価

評価の基準

4:よく取り組んでおり、成果が大きい
2:取り組んでいるが成果が十分でない

3:熱心に取り組んでおり、今後が期待できる
1:取組が不十分である

学校関係者意見等	評価
1 教育・学習内容を充実させ、確かな学力を身につけさせる	3.3
2 心の教育を充実させ、自己実現の意識の高揚を図る	3.5
3 食育や体育を充実させ、健康な体づくりに取り組む	3.3
4 安全な教育環境を確保し、防災意識の高揚を図る	4
5 家庭・地域・学校の連携を深め、信頼され、活力に満ちた学校園づくりに取り組む	3.5
教育目標	3.6
・校外でもよくあいさつしてくれます。	
研究テーマ	3.3
評価項目 (A:優れている B:適切である C:おおむね適切である D:要改善)	評価
アンケート等、自己評価の根拠となる資料は適切か	A
自己評価の結果の内容は適切か	B
自己評価の結果を踏まえた今後の改善策は適切か	B